

博士学位論文審査要旨

2021年1月16日

論文題目： 「いけばな療法」の信頼性の検証と普及のための実証的研究

学位申請者： 浜崎 英子

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 新川 達郎

副査： 総合政策科学研究科 教授 今里 滋

副査： 総合政策科学研究科 教授 服部 篤子

要 旨：

本研究の目的は、日本の伝統文化である華道の精神性をベースにした「いけばな療法」の確立とその普及や発展のソーシャル・イノベーションを展望することにある。認知症非薬物療法としての「いけばな療法」の開発と実践が、疫学的にも社会科学的にも信頼性があり有効であることを明らかにし、さらにはその理解を広げ社会的な支持を得て、認知症をはじめとする多様な人々を包摂できる社会への変革を起こすことを目指している。

論文においては、第1章で、研究の背景、目的、対象、方法の研究の枠組みを示す。第2章では、華道の歴史をふりかえり、その思想や活動から華道精神とは何かを示す。さらに、華道界が抱える課題とその解決方法を考察し、「いけばな療法」の意義を検証する。第3章では、「いけばな療法」の方法論について、心理学や非薬物療法の学術研究の知見から整理し、その手順について示す。第4章では、認知症ケアの方向性について先行研究や先行事例から示唆を得て、「いけばな療法」の展開の方向性を示す。第5章では、「いけばな療法」により社会的インパクトを生み出す、ソーシャル・イノベーションの仮説を先行研究や事例から構築し、普及に向けた社会実験の構想を示す。第6章では、「いけばな療法」対象者の個人の変容についてその効果を考察する。対象者は、認知症高齢者、認知症高齢者入居施設職員である。第7章では、「いけばな療法」について専門職に向けたアンケート調査、専門職への研修を行い、「いけばな療法」が福祉業界で信頼され受け入れられるかを分析する。第8章では、社会的インパクト創出に向けた仮説に基づき考案した「いけばな療法」の普及のために行った社会実験「いけばな街道」について、目的、方法、結果、課題を示した。第9章では、COVID-19の感染拡大状況の中で、その課題解決方法として新たな生活様式に準じ取り組んだ社会実験「いけばな街道2020」（オンライン融合の方法）の目的、方法、結果を示した。第10章では、「いけばな街道」および「いけばな街道2020」の成果から、その意義を考察し、非薬物療法の社会での役割を検討した。第11章では、「いけばな療法」の信頼性を高め、普及するための組織、制度、システムとして期待される日本いけばな療法学会の設立プロセスやその役割を考察した。第12章では、「いけばな療法」のネットワークの広がり、組織内の評価とビジネスモデルを示し、ソーシャル・イノベーションとしての成果を考察した。第13章では、本研究の到達点と研究課題を整理し、今後の展望を示した。

本論文は認知症非薬物療法「いけばな療法」の確立とその社会的な普及、そして社会的包摂を実現しようとする革新的な社会実践の研究成果である。医学的な実証や社会的普及には理論と実践の課題もあるが、本研究の価値を損なうものではない。よって、本論文は、博士（ソーシャル・イノベーション）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2021年1月16日

論文題目： 「いけばな療法」の信頼性の検証と普及のための実証的研究

学位申請者： 浜崎 英子

審査委員：

主査： 総合政策科学研究科 教授 新川 達郎

副査： 総合政策科学研究科 教授 今里 滋

副査： 総合政策科学研究科 教授 服部 篤子

要 旨：

学位申請者に関する総合試験は、2021年1月16日午後3時15分から1時間にわたって、同志社大学志高館において実施された。審査委員からは、華道の精神性と実用的ないけばな療法との関係や、華道界の問題解決との関係、「いけばな街道」の普及モデルなどについて質問があったが、学位申請者は研究結果から得られた専門的見地からの的確に答えた。語学試験（英語）については、多数の英語引用文献の適切な理解がされていることを通じて、その運用能力を認めることができた。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 「いけばな療法」の信頼性の検証と普及のための実証的研究

氏名： 浜崎 英子

要旨：

本研究の目的は、日本の伝統文化である華道の精神性をベースにし、いけばなの制作プロセスや作品を、人々の心のケアや非薬物療法として役に立つ「いけばな療法」として開発し実践することは、疫学的にも社会科学的にも信頼され、有効であること、さらには、「いけばな療法」を確立し普及するプロセスでは、さまざまな人を巻き込んで、社会変革を起こすということに効果的なことを明らかにすることである。

研究の対象は、2007年から2020年の「いけばな療法」の実践により対象としてきたフィールドを対象とする。臨床実践の事例がのべ40,000名を超える施設入居の認知症高齢者およびその周囲の人や環境、「いけばな療法」実践者、「いけばな療法」の普及プロセスにおける、直接的、間接的な関係者も研究の対象とした。

本研究は、第1章から第13章で構成している。第1章は、研究の背景、目的、対象、方法、研究の枠組みを示す序論の位置づけとした。

ソーシャル・イノベーションにより創出される、社会的インパクト評価は、「事業のニーズ、事業のセオリー、事業のプロセス、事業のインパクト、事業の費用対効果」により評価されることから、社会実験を実施する対象分野の現状の分析、「いけばな療法」の方法論考案の根拠を第2章から第4章にて示した。

第2章では、華道界では、入門者数の減少、特に若い世代の入門が激減していること、それに対しての解決策は、斯界を横断する研究や実践、組織の必要性、華道の精神性に基づく新しい視点が必要だとされていることを明らかにした。さらに先行研究や華道家元思想、インタビューから華道の精神性について定義し、「いけばな療法」はその精神性に基づき展開されていることを示した。

第3章では、「いけばな療法」のアイデアは、一定のエビデンスが明らかにされている心理療法の統合的アプローチであること、非薬物療法の標的分野である認知面、感情面、行動面、心理面に作用する構成がされていること、いけばなの制作プロセスは、記憶の分類と関連が深いことを明らかにした。

第4章では、認知症ケアの方向性を先行研究や先行事例から示唆を得て、「いけばな療法」の展開の方向性を示した。認知症ケアの分野では、認知症の治療では、周辺症状（BPSD）への治療に対しては非薬物療法が優先されること、非薬物療法のエビデンスは医学的なエビデンスを求めつつ、当事者や周囲の人のQOLを高める方法であることが重要視されることが示された。そして、認知症ケアの方向性は、認知症の人の社会参加できる仕組みやプログラムが必要とされ、認知症の人のみならず、家族や介護者もケアの対象とすることを確認した。

第5章では、「いけばな療法」により社会的インパクトを生み出す、ソーシャル・イノベーションの理論仮説と作業仮説を、先行研究や事例から構築した。

第一の仮説は、「いけばな療法」は、対象者個人が抱える課題に対して、有効に作用すること。

第二の仮説は、第一の仮説の効果があるならば、認知症ケアに関係する専門職から「いけばな

療法」は受け入れられ、信頼を得て、方法論を学ぶことで専門職が実践できるモデルが構築できるとのこと。

第三の仮説は、信頼性を得られるアイデアであることが確認できた段階で、協働、連携につながる仕掛けを実践することで、「いけばな療法」の新たな理解者が増え、ネットワークが拡大し、普及していき、参加したそれぞれの人にも心理的、発達的な成長が見られること。

第四の仮説は、活動の普及や拡大に伴い、その担い手である「いけばな療法士」やその組織に成長が見られるようになり、制度化や体系化の準備も整い、良い循環が起きること。そして構築されたシステムの中には、誰もが包摂される社会の様子が見られること。

これら仮説に基づいて、四つの社会実験を行い、その目的、方法、結果、考察を各章で整理した。

第6章では、「いけばな療法」を認知症高齢者に実施し、その効果検証、介護施設職員と認知症高齢者の家族への影響を分析した。認知症高齢者への効果は、自己表現能力の向上、五感の刺激、BPSDの変化、記憶の喚起に作用することがわかった。施設職員については、ストレス度合いや「いけばな療法」についての意識に変化があった。さらに、「いけばな療法」は、介護者と認知症高齢者の調整役となり、相互理解に役立ち、人と人との関わりを深めることも明らかとなった。非薬物療法の効果とされている認知症のBPSDの中でも、これまであまり効果が確認されていなかった、易怒性や攻撃性にも効果的に作用することも明らかとなった。

第7章では、「いけばな療法」について専門職に向けたアンケート調査を実施し、専門職への研修を行い、実践できるモデルとなるかを検証した。その結果、「いけばな療法」は専門職に認知症ケアとして一定の信頼を得た療法となっていることを確認した。専門職が研修を受け、施設内で実践した場合も、「いけばな療法士」が実施する場合とある程度の効果は一致した。そして、研修を受け、実践をすることで、これまで関わりがなかった華道やいけばなの本質を理解し、関心を持つこともわかった。

第8章、第9章、第10章では、「いけばな療法」の拡大・普及の段階として、さまざまな人を巻き込む仕掛けを備えた「いけばな街道」の開催を社会実験として行った内容とその成果を考察した。

「いけばな街道」の開催により、協働や連携は広がりを見せ、参加した個人、組織の成長や相互関係の変化も観察された。2020年の感染症拡大時のオンラインを融合させた「いけばな街道2020」の方法論においても同様の成果は見られた。さらには、「いけばな療法」においては、協働の要素が、活動自体を協働で進めることと、作品を協力し合い作り上げる点の二つの側面があることも効果的に作用することも明らかとなり、伝統文化であるいけばなの社会的な価値を協働による新たな側面で見出せたことが示せる結果となった。

このような成果に導いた重要な点として、活動への参加のしやすさが関わっていることも明らかにした。参加のしやすさは、人々の状態により異なるため、様々な段階で参加できる仕組みがソーシャル・イノベーションに向けた普及・拡大の段階で有効な可能性も示した。

第11章では、「いけばな療法」の信頼性を高め、さらに普及することを目指し、制度化、システム化を実現するために設立した、日本いけばな療法学会の役割を示した。

日本いけばな療法学会は、華道界の課題解決策として求められている、斯界を横断する組織や研究の推進に役立つ機能をもつこと、いけばな療法士を養成し、資格認定を行い、「いけばな療法」の普遍的な質の担保やその効果、制度を客観的かつ公平に評価、判断する役割を担っていることを確認した。そして、「いけばな療法」は個人が抱える問題を対象とする療法にとどまらず、組織、社会が抱える課題についても対象とし、いけばなによる社会の療法でもあることを明示していることで、これまで華道界と直接的に関りがなかった人との関係が日本いけばな療法学会

を介して生まれることも示した。

第12章では、ソーシャル・イノベーションとしての成果を総合考察した。

事業開始当初と比較すると、普及・拡大するに従って、組織の様子も成長段階に達し、組織内の個人の成長にも影響を及ぼした。ソーシャル・イノベーションのプロセスにおいて、「いけばな街道」の開催が、効果的に個人、組織に作用し、さらなる拡大のステップにつなげられる段階となったことも確認できた。これらは、第四の仮説としたそれぞれの成長が、外部との関係にも相互作用し、良い循環が起きた。

「いけばな療法」の更なる普及や拡大に向けて、必要な要素を先行研究や先行事例から整理し、提示した。今後の展開においては、ビジネスモデルを構築し、資金の流れを作り、市場の力を活用するシステムをつくること、そして、そのシステムの中でハブとなるものは日本いけばな療法学会であり、そのハブの機能を充実させていかなければならないことを明らかにした。

第13章では、本研究の到達点として、「いけばな療法」が解決を目指す社会的な課題やニーズの分析の正確性、根拠と信頼性あるいは確実性のあるアイデアである適切性、そして普及過程で協働や連携につながる、参加型の仕かけの重要性とその作用により普及・拡大に結び付く拡張性を確認することができたことをあげ、「いけばな療法」によるソーシャル・イノベーションを実証する本研究の目的は達成できたことを示した。

ソーシャル・イノベーションを目指すためには、アイデアの普及や拡大を一時的なもので終わらせないために、アイデアを始めとする質の担保は重要で、そのためにもモデルの構築だけではなく、そのモデルを検証する機能を兼ね備えたシステムを構築することの重要性も明示した。また、本研究は、華道という伝統的な文化を活用したソーシャル・イノベーションの一例を示したことに留まらず、他の生活文化領域においても応用展開ができるものであり、それぞれの文化振興にとっても貢献できる可能性を示した。

今後の研究課題には、医学的なエビデンスの構築と非薬物療法は、個人の治療に留めるのではなく、そうした人々を包摂できる社会の形成に貢献できる療法とするための評価指標の考案をあげ、今後も実践と研究に取り組むことを述べて本稿を締めくくった。(3906字)